

## 体育系学術連合 第1回記念大会シンポジウム

### 「障がいのある子どもたちの身体活動・スポーツについて考える」

#### 報告書

#### 1. シンポジウムの概要

日本アダプテッド体育・スポーツ学会（JASAPE）より、障がいのある子どもたちの身体活動・スポーツの現状と課題について焦点をあてるシンポジウムの企画提案を行った。今回は、小中学校の現状と課題、重度障がい児や発達性協調性運動障がい(DCD)を有する子どもたちの身体活動の現状と課題に関する報告を受けて、障がいのある子どもたちの身体活動やスポーツの意義を考える機会を設定することを目的とした。

冒頭、座長の安井友康氏（北海道教育大学）より、今回のシンポジウムの趣旨説明が行われ、その中で、これまでの学校体育においては、発達障がいをはじめ様々な教育的ニーズを持つ子どもの体育・スポーツのあり方が十分に考えられてきたとはいえない現状を踏まえ、より多くの関係者が、多様な教育的ニーズ・障がいのある子どもの体育・スポーツの現状と課題を共有し、今後の日本の体育のあり方を議論する必要性が強調された。次に、金山千広氏（神戸女学院大学）より、小中学校における障がいのある子どもたちの身体活動・スポーツの現状と課題について、2006年に実施した小学校、中学校に在籍する障がいのある児童生徒の体育授業に関する全国調査結果（山崎ほか 2006）を受けて、実施種目、授業実施形態および、地域の特徴などの観点から、障がいのある子どもの体育授業の現状と課題について報告がなされた。続いて、増田貴人氏（弘前大学）からは、発達性協調性運動障がい(DCD)のある子どもたちの身体活動・スポーツの現状と課題について、国内での DCD の認知はまだ十分ではなく、教育支援体制が量質ともに整っていないこと等が報告された。また、澤江幸則氏（筑波大学）からは、障がいのある子どもたちと障がいのない子どもたちの協働活動の現状と課題について、インクルーシブ体育・スポーツを実践するためには、障がいのない人と同様に、障がいのある人がスポーツを、地域において日常的に行う機会を損なわれないようにすることであり、何より、障がいのある人が運動・スポーツをすることに対して当たり前と思える地域の人たちが増えることの必要が報告された。そして、田中信行氏（日本体育大学）からは、パラリンピックを中心とした障がいのある人のスポーツの振興には大きな意義がある一方で、非常に重度の障がいのある人たちが積極的に身体活動やスポーツを楽しむ環境づくりが置き去りにされる懸念があることから、パラリンピックなどの華やかな場への機会が限られている重度の障がいのある人、特に先天的に重度の障がいのある子どもたちがスポーツを楽しむことができるシステムづくりが重要な課題であることが指摘された。さらに、その取り組みの意義について、島良紀氏（日本ハンドサッカー協会）から、非常に重度の障がいのある人も参加できるハンドサッカーという団体球技の普及活動を生きがいにしていたが、今年5月6日に他界したひとりの難病のある女性の事例をもとにした報告がなされた。これらの報告内容に対して、フロアの参加者の意見を交えながら討論し、諸課題の共通理解を深める機会となった。

#### 2. 参加者の概要

日本体育学会会員、日本アダプテッド体育・スポーツ学会会員、特別支援学校教員、重度障がい者とその家族を含む46名

#### 3. 感想と意見

この種のシンポジウムの重要性に鑑み、他のシンポジウムと同時間帯での開催ではなく、別の時間帯を設定することによって、他の領域の参加者も参加しやすくする配慮が必要と感じた。また、広く一般の方の参加を促す広報の方法についても、今後検討が必要と感じた。

【文責：植木章三（大阪体育大学・日本アダプテッド体育・スポーツ学会副会長）】